

「キャリア・アンカー」から見た自己認識と将来志向

小柳津 久美子

愛知東邦大学

「キャリア・アンカー」から見た自己認識と将来志向

小柳津 久美子

目 次

- I. はじめに
- II. 実施内容
 - 1. 授業プログラム
 - 2. 授業マネジメント
 - 3. 実施結果データ
- III. 考察
- IV. おわりに

I. はじめに

本稿では、1年前期配当のキャリア科目において学生がどこまで自己を認識し、将来志向を描くことができたかを考察したものである。なかでも自己認識・将来志向を考えるきっかけと位置付けたキャリア・アンカーに着目した。

「キャリア教育」という言葉は1999年に中教審「初等中等教育と高等教育との接続改善について（答申）」で使われた頃から認知され、普及していった。キャリア教育の定義は先の中教審答申によると「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技術を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」[1]とされている。

当初、高等教育機関では、キャリア教育は就職指導に置き換わる言葉のように使われることも多くあったが、年月を経る中で本来の定義に近づいた内容に変遷していった。長引く不況や大学のユニバーサル化などの社会環境変化が後押ししたとも言えるだろう。中教審は2008年教育課程の体系化の具体的な改善方策の一つに「キャリア教育を、生涯を通じた持続的な就業力の育成を目指すものとして、教育課程の中に適切に位置づける」[2]とした。高等教育におけるキャリア教育の在り方が問われてきた中、この意義は大きい。さらに、2011年には「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」において、その基本的方向性として「幼児期から高等教育に至るまでの体系的なキャリア教育の推進」[3]と打ち出し今日に至っている。

その様な中、A大学では2010年度就業力育成支援事業に選定され、2011年度入学生より新カリキュラムとして「就業力育成カリキュラム」を実施している。A大学は2学部3学科からなる大学である。学部共通の「総合基礎科目」の中には主に1,2年次に重点を置いた「A（A：は大学

学名) 基礎力科目」が設置されている。その内容は「基礎学力」「演習」「キャリア」の3分野である。

運用に向け配付された文書より1年次の内容を見ると、「基礎学力」では「読解力」を基礎・基本に置き、「聴く」「読む」「話す」「調べる」ことを扱う科目である。「演習」は少人数指導スタイルを取り、高大接続の導入教育として、学生同士の人間関係の構築をはかり、大学生活への導入を行うものである。「キャリア」は個人と社会の関わりを通して自分の将来を主体的に探り実現していくための態度を養うものである。[4]と記載されている。

特に「基礎学力」「演習」は全員必修としている。このように、初年次教育で扱われる内容を3分野を通して、異なった角度から学生に「学ぶ意義」を自覚させることを目的としている。

その中でもキャリア科目は1年次配当「ライフデザインⅠ」と2年次配当「ライフデザインⅡ」そして3年次配当「インターンシップ」「キャリアデザイン」の4科目から成る。全て選択科目の扱いではあるが、「インターンシップ」以外は全員履修として時間割に組み込まれている。

この中で、筆者は開講2年目となる「ライフデザインⅠ」を2012年度前期H学部において3クラス担当した。Ⅱ章ではその実施内容と、明らかになった点について述べるものとする。

Ⅱ. 実施内容

1. 授業プログラム

① 全体

授業プログラムは昨年度のシラバスに準じて作成した。昨年度は全学部1年後期に開講しており、今年度は諸般の事情によりH学部のみ1年前期に実施時期を変更した。開講時期の変更や、昨年度担当者の意見などを踏まえ、一部内容・実施順序を見直し、修正を加えた。

大学1年前期の授業であることから、自己を認識し、大学生活で何を目標とするかを見つけたら、「職業」より「働くこと」のイメージを持つことに力点をおいた。「家族・地域」「お金」についても身近な話題からアプローチし、社会の中での自分を位置付けさせ、自分の大切にしたいことや価値観を見つけられるような内容とした。(表1)

表1：各回の内容

STEP1：私を知る 1. オリエンテーション ライフデザインとは何か 2. 自分を知る・伝えるということ 3. これから、自分のやりたいことは何か 4. いま、自分のできることは何か 5. 目標設定とその重要性1 STEP2：世の中を知る 6. ライフキャリアとライフロール 7. 家族・地域と共に生きる	8. 多様な働き方とワークライフ・バランス 9. ライフイベント表を書く 10. 世の中の仕事 11. ライフマネー STEP3：私と世の中をつなぐ 12. 充実感と生きがい 13. 目標設定とその重要性2 14. まとめ1（ワークの振り返り） 15. まとめ2（ミニレポートの作成）
---	---

3つのステップの概要は以下である。STEP1では自分という人間に着目し、自分の特徴を理解し、その長所をさらに伸ばしたり、短所を補ったりするための目標を設定する。次にSTEP2では、目を内から外に、社会・地域に目を向け、仕事に限らず自分が暮らす地域の実情や生きていく上で求められる力を調べる。職業選択ではなく「働き方」に着目する。最後にSTEP3で自分と社会をつなぐことを考える。ここでは、内と外を理解した上で再度、今後の自分の在り方を考え、これからの学生生活を充実させるために何をすべきか各自で計画立案する。授業は演習（授業では「ワーク」と呼んだ）が中心である。1回の授業で平均2つのワークを行った。ワークは個人作業だけでなく、相談したり、小グループで発表したりすることをできる限り取り入れた。

また、H学部は2学科に分かれており、H学科は教員やスポーツトレーナーを目指す学生が少なくない。もう1つのC学科は幼児教育・保育に関わる人材を養成する学科である。そのため、この授業は職業選択を考える場ではなく、人生において社会との関わりや、生活の中での働くことの位置づけを考える機会にしてもらいたいこと、また、教育者・保育者として、自身が将来子どもたちを指導する上で、キャリア教育の観点も必要とされることを伝え、職業選択の決意が無意味に揺れ動いてしまうことのないように配慮した。

② 各回の内容

- ・第1回：オリエンテーション／ライフデザインとは何か

オリエンテーションとして、シラバスの説明。受講時のルールなどを説明した。

欠席が続く理由のひとつに生活リズムが作れないことが挙げられる。高校在学時からアルバイトを続け、一部には深夜にまで及ぶアルバイトで昼夜逆転してしまい、授業に出られなくなるというケースである。そこで入学直後に、まずは大学生活に慣れ、正しい生活リズムを作ることを狙い、1週間の「生活リズム調査」の課題を出した。内容は、起床・睡眠時間、3食摂取の有無、主な活動などを1週間記録させ、第2回の授業時に提出させた。遅れて提出した学生もいたが、履修者に占める提出率は89.1%で第1回の出席率が94.2%であったことを考えると高い提出率であった。睡眠時間については、平均7時間以上の割合が約70%あった。平日はやや少なめであっても休日で寝だめをして調整している様子が覗えた。平均4時間を切る学生は約5%であった。食事については、平日の朝食摂取に注目したところ、C学科では、3回以下の学生が70%強とH学科の20%弱とひらきがかった。C学科は女性が多く、ダイエットや身支度に時間がかかることが影響していると考えられる。

「生活リズム調査」を行うことは、その状況をこちらが理解するためというよりは、学生本人に意識させることが重要な目的である。学生の感想にも、「見直すことができた。」「日付が変わる前に寝ようと思う」「(食事を)自分で作るので大変だが、頑張って作りたい。」などの声が聞かれ、注意喚起の効果を果たすことができた。

・第2,3回：自分を知る・伝えるということ

セミナーなどのアイスブレイクで自己紹介ツールとしてもよく利用されている「Who am I? ～私は〇〇です。～」を用いて自分について思いつくことを記述させた。それを拡大する形で「自分ストーリー」¹を書かせた。表2にあるように5項目を幼少期から小・中・高・大学生に区切って記入させた。できる限り具体的に書くことを基本とした。この自分史の様なものは自己分析の最初に用いることが多く、筆者も過去に何回も類似したフォームを作成して使用している。ここで注意すべきことは「振り返りたくない過去がある」「これといった出来事がない（覚えていない）」という点である。そこで、回収しない、本人以外の者は見ない、ことを前提にすることで、できる限り詳しく書き、自身を振り返るよう指導した。但し、どうしても書きたくないことは書かなくてもよいこととした。また、空欄になってしまう点についても過去はもう埋められないのでその状況を踏まえて、これからどうしたいか考えるように未来に目を向けるように促した。

表2：自分ストーリーの項目

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・得意(好き)な科目・研究課題・学業以外に力を注いだこと・特徴(強み・ウリ)・趣味・特技・免許・資格・表彰 |
|---|

「自分ストーリー」を学生が記入した後に、これには仕掛けがあることを説明した。この項目は、就職活動時に記入する履歴書の自己紹介書の項目と同じあるということだ。過去は空欄でも構わないが、大学時代が空欄では就職活動時に大きな支障をきたすことを伝えた。

・第4回：これから自分のやりたいことは何か／今自分のできることは何か

前回扱った履歴書の話から少し先に目を向けさせ、「目標設定」の意義とその方法について説明を行った。いきなり目標と実行計画を考えさせることは難しいと考え、まず、長所と短所を整理させた。その後、自分のやりたいことを「大学編」「将来編」に分けて書かせてみた。「目標」や「なりたい自分」が特にない学生が目立った。また、目標を書くことができたとしても、「(運転)免許を取りたい」「旅行に行きたい」等の行動欲求の内容が多かった。自分の将来の姿を描き、そのために何をしたらよいか。という目標と行動の関係を構築できていない学生が目立った。なりたい職業が決まっても、「なんとなく」のレベルであることもあるだろう。また、思考を論理的に組み立てることを苦手とする学生が多いことも挙げられる。そのような学生は、一対一でこちらから「なぜそうしたいのか」「どうしたらよいと思うか」と質問を繰り返していくことで引き出せる場合が多い。また、学生によって、「将来のことはまだ分からない。」「将来のことは書けるけれど、大学で何をしたいか分からない。」等様々な声が出た。

演習中心と言っても50名近くの履修者で行う授業のため、個別指導は十分できていない。1年生の前期の段階で、目標を持つことで学生生活を有意義に使うことができるようになること

〈注〉

¹ 自分史のように過去の経歴を記入させたもの

が多いが、そこまで持っていくことは今の授業形態では困難である。少人数単位で行っている基礎演習との連携が必要であろう。問題があると思われる学生に個別指導を試み、授業外の指導を行った。対象は4名。2名に対応し、基礎演習の教員とも連携を取る等して状況は改善された。残り2名のうち、1名は退学。1名は出席過多で単位未取得という結果に終わった。

・第5回：目標設定とその重要性 1

いよいよ具体的な目標設定である。A大学では2011年から入学者全員にiPod touchを配付し、e-ポートフォリオを運用している。WEB環境で動くので、パソコンでも操作は可能なものである。e-ポートフォリオでは、授業の記録や、目標管理が各自でできるようになっている。e-ポートフォリオを用いた目標管理の指導は基礎演習を中心に行うことになっているが、その操作方法については筆者が所属している学修支援センターでサポートすることになっている。基礎演習では新入生に学部学科で学ぶ上で必要な情報など指導事項が非常に多くある上に、本来のゼミ活動の時間を十分に取りたい所である。目標設定の入力の時間は確保できても、それ以上の時間を確保することはなかなか難しいようだ。そこで、本授業で目標設定の意義や入力のための下準備の時間を取って学生に指導し、連携を図った。

スマートデバイスは教育ツールとして大学でも普及し始めてはいるが、学生によって得手不得手がある。A大学で使用しているiPod touchはiPhoneを使用している学生には操作が同じなので問題ないが、他の機種スマートフォンを持っている学生、旧来の携帯電話を持っている学生は慣れていない。また、メディアリテラシー科目である「入門コンピューター」（1年前期必修科目）も同じ時期に行われているので大学のパソコンも使い慣れていない。使い慣れている者にとっては思考しながら入力ができるが、慣れていない者にとっては操作そのものに意識がいくため困難な点がある。そこで、e-ポートフォリオの項目に併せたフォームを用意し、紙ベースで記入させた。また、事前練習として、前回記入した「自分ストーリー」をe-ポートフォリオのプロフィール欄に入力する時間もとり、操作に慣れてもらった。後日、基礎演習時間内に、学生は紙に書いた目標と達成のための計画を入力した。

・第6回：ライフロールとライフキャリア

今回から社会に目を向けていく回である。まずは、世の中での自分の役割を示すライフロール²の説明を行った。ライフロールは表3に示すように8つある。大切なことは、この役割は同時に複数持つことができ、人生に占めるそれぞれの役割の割合はその時々で組み変えることができる点である。

表3：8つの役割

・子ども	・学生
・職業人	・配偶者
・ホームメーカー	・親
・余暇を楽しむ人	・市民

〈注〉

² アメリカのキャリア研究者スーパーがその著書の中で示した人生における8つの役割
Super,D.E. “A life-span, life-space approach to career development” Career Choice and development :
Applying contemporary theories to practice. Jossey-Bass (1990)

組み変えるタイミングは年単位とは限らない。1日の中でも変わる。もちろん自分の意思だけで変えられる訳ではない。家族や周囲の者と協力し、お互いが補い合って成立させていくものである。そのことを学生に伝えた上で、学生には今の自分の役割と10年後の想像した役割を横棒グラフの形式で記入させた。(図1)これにより、学生は現在の学生生活を振り返ることとなった。そして10年後希望する役割を記入することで現在とのギャップを認識することになる。ギャップを埋めるためにはどうすればいいか。目標設定のための材料をここで学生は得ることができる。

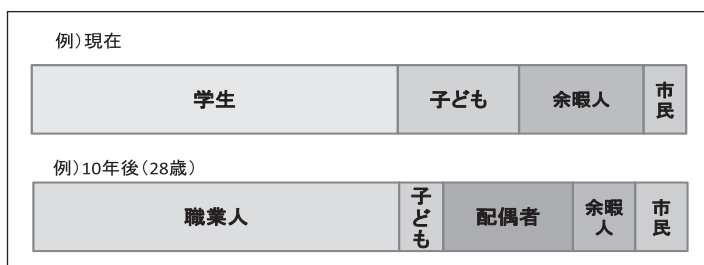


図1：ライフロールの組み合わせの例（例示資料）

・第7回：家族・地域とともに生きる／第8回：多様な働き方とワークライフ・バランス

この2回は、導入としてデータを通してテーマに関する社会の現状を把握する形式をとった。第7回では日本の人口動態を中心に扱った。穴埋め問題とし、iPod touchやスマートフォン・携帯電話を使って調べさせた。その後、解答を示し、気づいたことを書かせた。この様に、初めからデータを示すのではなく、まず考えさせたり、調べたりする時間をとり、データが右から左に流れず、止まるように工夫した。自分の住んでいる町や育った町、住みたいと思っている町の特徴を挙げさせた。項目はいくつか例示したが、例示以外のことで各自で設定してよいことにした。大半は生まれ育った町を扱っていた。将来自分が住んでみたい町を扱った学生は数人であった。

授業後の感想では「ずっと住んでいるのに知らないことがたくさんあった。」「自分の町を誇りに思う。」「実家に帰りたいと思った。」「もっと多くの人に自分の町を知って欲しいと思った。」「何もない所だけれどそれがいい。」等、生まれ育った町を大切に思う内容が多く挙がった。

第8回のデータは「働くこと」についてだ。労働人口、雇用における様々な格差の問題などを扱った。ほとんどを数値ではなく割合で書かせる内容にした。一般的な社会においては正しく数値を覚えていることより、だいたいこのくらいと言った目処がつけられることが必要とされるケースが多いからだ。ライフバランスを学生に考えさせるために格差や社会問題について「YES・NO」で答えを決め、答えの違いを話し合う、ミニ討論会を予定した。しかし、自分が少数派であることが分かると手を下げてしまい、討論が成り立たなかった。そこで、筆者が教室を巡回し、数人の意見を発言させたり、読み上げたりする形をとった。

・第9回：発表

本来はライフイベント表がテーマであったが内容を変更した。7, 8回で町について特徴を挙げさせた際の学生の反応が非常に良かったので、町の特徴について小グループで発表させることとした。当初予定していたライフイベントはライフロールと重なる点も多いので、そこに吸収させることとした。

小グループでの発表はすでに第2, 5回でも行っており、かなり慣れてきた様子であった。お互いの町を知ることで「遊びに行ってみたい。」「住んでいる町のことを思う気持ちが良く分かった。」などの感想が上がった。

・第10回：世の中の仕事／第11回ライフマネー

1年前期であること、すでになりたい職業が決まっている学生もいることから、第10回ではどんな仕事があるかということではなく、コンビニ弁当を分解することで、仕事のつながりに気づかせるようにした。しかし、弁当の具材の洗い出しまではできても、どのような工程で出来上がるかを考えることは少々困難だった。そのため、かなり補足する結果となった。

もう1点のワークは、好きな役割を選んでもらうものだ。ホランドの六角形³の役割をベースに大学祭のコンサート運営でどんな役割をやりたいか、それはなぜと言ったことを書かせ、自分の中にある職種あるいは、志向を気づかせることを目的とした。しかし、働くことがまだ自分にとって遠いことだと感じている学生にはその目的が十分伝わらなかった点もあり、「どれもやりたくない。」と答えた学生が数人いた。

働くことについてもう少し具体性も必要だと考え、第11回では、3人の働く人のレポートを読み、共感した人を選び感想を書いてもらった。こういった授業では、外部スピーカーを招聘し、話をしてもらうことが多い。しかし、外部スピーカーは何人も呼ぶことは難しい。また、仕事について掘り下げる段階でもない。そこで、文章で複数人の仕事の様子や仕事観を読み取することを主とした。素材の選定は学科によって変えた。

また、お金については将来にわたるお金を考えても漠然としすぎるので現在の個々の収支について書かせた。比較の為に自宅生と一人暮らしの学生の平均値を提示した。特に自宅生は自分がどのくらい何にお金を使っているか、その出所はどこか把握できている学生は少なかった。また、計算上の収支と現実と比較して検証するような行動を取る学生は多くはなかった。

また、お金の大切さを伝えるために学費を例に出して、お金や時間を無駄にしないようにということと、アルバイトのし過ぎで授業に集中できないことは、トータルでマイナスになることを伝え、アルバイトに没頭することに注意喚起を促した。

〈注〉

³ パーソナリティを現実的・研究的・芸術的・社会的・企業的・慣習的に分類したもの

・第12回：充実感と生きがい

残り4回、最後のステップに入った。最後のステップではこれまでの自分や社会について知り得たことをベースに自分の生き方の価値観を明らかにし、これからどのようにしていきたいかを考えさせるものだ。

ここでは、自分の「モットー」と「働くことで期待すること」を選んで自分の価値観を考えさせた。この授業は「正解がない」授業であることを繰り返し伝えている。特に価値観については他人の価値観を理解できなくてもよいが、受け入れることが重要であることを伝え、少人数でお互いが選んだ価値観を発表させた。

仕事の価値観として「給料が高い」ことに対し、総じて男子学生は上位にあげる者が多いが、女子学生は選択した者はほとんどいない。学生からの感想でもそのことが上がっていた。ワークライフ・バランスを扱った回で女性のほとんどが「男は仕事、家事は女」の考え方にNOを示したにも関わらず、専業主婦志望の女子学生は少なくない。このことから、学生は働き方については、自分の価値観を持っているというより、実際の家庭の状況や、社会で言われる意見に左右されているステレオタイプが多いことが見て取れた。

・第13回：目標設定とその重要性2

第5回に設定した目標に対する実行状況の進捗や目標の追加訂正を行い、結果をe-ポートフォリオに入力させた。目標を立てたものの、全く取り組んでいなかったり、現状とは異なってきたりする者も多く、よい見直しの機会になったようだ。

この回の導入は「求められる人材」をビンゴ形式で考えさせることを行った。少し難しく捉えがちな「求められる人材」もゲーム形式にしたことにより取り組みやすかったようだ。

・第14回：まとめ1／第15回：まとめ2（レポート作成）

まとめとして、キャリア・アンカーについて考えさせ、入学してからこれまでの振り返りをミニレポートとして書かせた。これについては第Ⅲ章で詳しく述べたい。

2. 授業マネジメント

① 紙ポートフォリオ

本授業では、毎回授業の最後に感想や意見と「充実度」という各回の授業評価にあたる項目を記入させている。ツールとしてe-ポートフォリオでの受講記録を用いず、紙のポートフォリオを使用した。e-ポートフォリオは自身の振り返りのための記録ツールであるが、筆者は紙ポートフォリオに3つの機能を持たせている。1点は学生自身の振り返りツールとして、2点は出席管理ツールとして、3点は教員と学生、また学生間のコミュニケーションツールである。これらは紙媒体でやりとりすることが一番効率的である。A大学のe-ポートフォリオは学生が記入した受講記録を科目担当教員は見るができる。CSVでダウンロードすることもできる。しかし、

出席管理という点では、Web環境で動くe-ポートフォリオは場所・時間の抜け道があるために向いていない。

図2に紙ポートフォリオの一部を抜粋したものを挙げた。A3を二つ折りにし、1枚に毎回の感想を書くようになっている。1回あたり4cm×11cmの大きさで120文字ほど書くことができる。「充実度」という項目を設け、学生は授業を充実して受けることができたかを5段階で自己評価する。もちろん学生自身、体調が優れず集中できなかったなどの理由はあるが、各回の授業の評価とほぼ等しい。

[illegible]

図 2 : 紙ポートフォリオ

授業後、全てに目を通し、押印とコメントを記入する。内容によっては下線のみで済ますこともある。質問や、勘違いなどには特に丁寧にコメントを入れるように心がけてきた。次の回の冒頭で、主な意見を紹介し、全員で振り返りを行い、当日の授業に入っていくようにした。

この様に、ポートフォリオを用いて、一方的な講義ではなく、教員と学生、学生同士の双方向に考えや意見が行き交う授業を心がけた。

また、ポートフォリオは教員からの連絡事項を伝えるツールとしても活用した。提出物が出ていない学生へのコメント。欠席が続く学生への働きかけなどに使用した。

② 4部構成

授業は基本4部構成とし、メリハリをつけた。最初の10分は先に述べたように、前回の振り返りと補足。真ん中70分は30分～40分を使い2つのワークを行う。最後の10分はポートフォリオに感想を記入し、毎回のプリントを回収する時間とした。

最初の10分は振り返りとともに、授業に入るために意識を切り替えさせる時間だ。ほとんどの学生はこの10分の間に授業に意識を集中させていくが、なかなか集中できない学生もクラスによっては多くいた。座席指定をして気の合う者同士を座らせないという方法もあるが、行わなかった。授業の内容から気の合う者同士だからちょっとした相談ができる空間にしたかったからだ。ただ、学生の授業評価アンケートからは授業に集中できないという声もいくつかあり検討の余地がある。

2つのワークの組み合わせはテーマや扱う内容による。メインの導入として1つの目のワークを行う場合もあれば、2つが並列した関係であることもある。集中力が切れないことを最大の目的として一つのワークは30分～40分にした。

③ 学生間コミュニケーション

この授業では、「発表」と「相談」の場面を作り、学生間のコミュニケーションを重視した。

「発表」は、3～5名程度の小グループで行う機会を3回、そして最後に全員の前で発表する

機会を1回、設けた。また、ミニ討論会を1回行った。

就職活動において学生が苦手とすることのひとつにプレゼンテーションや面接などの「人前で話すこと」がある。本授業は就職のハウツーを目的とはしていないが、就業力という点からでもできる限り学生が発表する機会を多く設けてきた。そして、相反するようだが、プレゼンは「話すことより聞くこと」を重視してきた。大学1年生前期の段階では、まず「インプット」だと考える。大学を知ること、社会を知ること。その上で自分がどうしていきたいかを考えることが重要だ。就職活動におけるプレゼンや面接もまずインプット（なんらかの条件提示や指示）から始まる。そのためには「聴く」ことへの意識付けが重要だ。発表の際は、聴くことに集中できるように、「評価表」「感想」など記入するシートを用いた。

「相談」は、この授業の特性である、人生について考えるということは学生個人のプライバシーに踏み込むことが多い。気心の知れた人に自分のことを相談しながら考えたい。そのため、授業は座席を指定せず、またワークの時間には内容に応じ、周辺の学生同士で相談可としてきた。しかし、切り替えができない学生もあり、相談の時間でない時に私語が止まらない。相談の時間に全く関係ない話で盛り上がりすぎてしまい大声になり、周辺の学生が集中できなくなるということが起った。A大学で実施している授業評価アンケートにもその点を指摘する学生からの意見があった。

もちろん、騒ぐ学生ばかりではない。同じクラブ・サークルだから状況が分かり、相談して自分のことを考えたり、比較的小となしい学生同士でも信頼関係があるからこそお互いの考えを述べ合ったりする光景も見られた。

私語の対策は教員も頭を悩ませる問題だ。座席を指定にする。試験は持ち込みノートのみ可として、板書を写す時間を多く取る。など、とにかく話す環境を作らない対策を講じている授業もある。しかし、先に述べたように本授業は黙って自分の世界に入ってもよい結果が生まれるとは言えない。お互いが共感しあったり、違う意見を認め合ったりする課程が重要なのだ。私語をなくすことと、学生間コミュニケーションを積極的に行う環境を両立させるために授業のメリハリのつけ方や、授業に没頭できるような内容をもっと考えていかなければならない。

3. 実施結果データ

① 履修状況

本授業は先に述べたように選択授業ではあるが、全員履修の授業として必須科目と同様に時間割に組み込んで受講を促している。自分の意思とは別に履修を強いられているとも言え、受講に対する意識は分かれるところである。全員履修を促していることを踏まえ、授業はハードルをあまり高く設定しなかった。出席し、その日のワークに取り組み、提出することの積み重ねを重視した。紙ポートフォリオで出席管理を行うと同時に授業に対する理解度や取り組み姿勢を把握した。履修状況は以下の通りであった。

出席状況は表4のとおり。3クラスいずれも欠席回数5回以内は90%を超えている。クラスご

とに見ると、C学科は欠席0回の学生の割合が他2クラスに比べ低い。これは、5限の授業ということで、4限までの授業の有無やその内容によって左右される点が大きい。併せて図3の各回の出席率の推移をみると分かるが、C学科は出席率が回によって非常に幅がある。また、出席率の平均も77.9%と最も低い。H学科は水曜4限が82.5%、金曜3限が85.1%となっている。金曜3限の出席率が最も安定しており、学生の受講態度も最も安定していた。

表4：クラスごとの欠席回数分布

数字は人数。（ ）内はクラスにおける割合

	0回	1～3回	4～5回	6回以上	合計
H学科	33(30.3%)	46(42.2%)	24(22.0%)	6(5.5%)	109(100.0%)
水曜4限	16(29.6%)	22(40.7%)	12(22.2%)	4(7.4%)	54(100.0%)
金曜3限	17(30.9%)	24(43.6%)	12(21.8%)	2(3.6%)	55(100.0%)
C学科(水曜5限)	5(10.6%)	27(57.4%)	11(23.4%)	4(8.5%)	47(100.0%)
合計	38(24.4%)	73(46.8%)	35(22.4%)	10(6.4%)	156(100.0%)

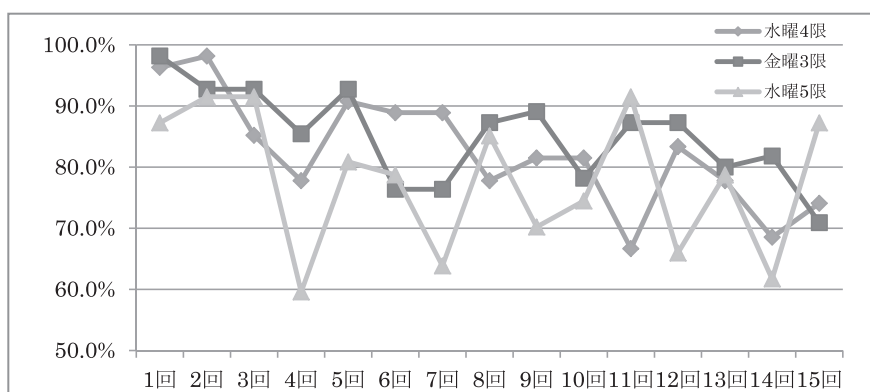


図3：各回の出席率の推移

また、図3からは、若干ではあるが、徐々に出席率が下がっていく様子を読み取れる。大学生活に慣れてくると、「5回までは休んでもよい。」と勘違いする学生が増えることによるものであろう。とはいえ、欠席5回以下の学生の欠席回数の平均は2.1回となっており、まじめに出席している学生がほとんどである。

紙ポートフォリオには「充実度」を毎回つけさせている。その日の授業は充実していたかどうかを5段階指標で記入させたものである。その推移は図4に示すとおりで、大きく下がっている第3回は過去を振り返って書き出す「自分ストーリー」の回である。金曜3限（H学科）と水曜5限（C学科）は緩やかな右肩上がりの傾向が見られるが、水曜4限（H学科）は第7回の自分の暮らす町について調べた回以降、下がり気味となっている。充実度は大学が実施している授業評価アンケートと併せてみると、授業の理解度との相関が見られた。同様に理解度の低下は出席率の低下とも関連が窺えた。

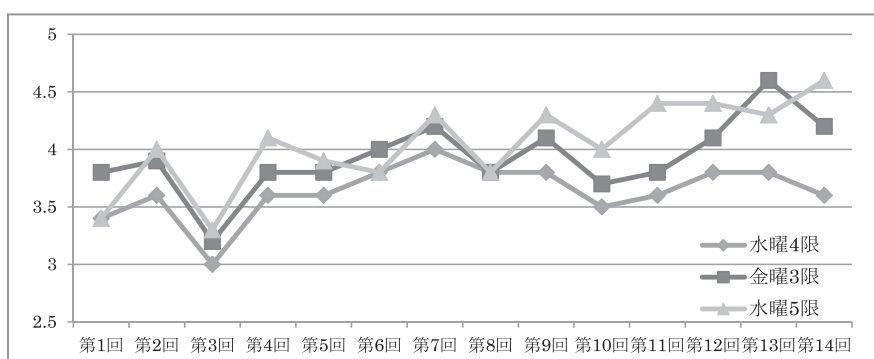


図4：各回の充実度（平均）の推移

授業評価アンケートから、3クラスを比較すると、水曜4限のクラスは他に比べ、「授業中の教材の使い方は適切だった」「授業は理解が深まるように工夫していた」の設問における最上の評価7の割合が10%程度少ない。「授業が分かりにくい→私語の増加」ということも考えられる。どのような学生の割合が多いかによって、クラスの雰囲気というものが生じる。このようなケースでは、教材を変えるほどの問題ではないと判断するが、説明をより丁寧にし、時間を割く。同じワークでも例を具体的に挙げるなどの対応が必要だろう。

② 成績評価

シラバス上および、第1回のオリエンテーションではこの授業では単位認定の方法として、試験は行わず、成績は出席態度や提出物等から総合的に評価すると学生に伝えた。実際は、紙ポートフォリオの記入状況を授業態度として各回0～3点×15回（45点満点）毎回のワークのうち1点を提出させ、その内容を各回0～3点×15回（45点満点）。第15回のミニレポートを10点満点として成績評価を出した。評価の分布は表5の通りである。

表5：成績評価の分布

数字は人数。（ ）内はクラスにおける割合

	A+およびA	B	C	D	K
H学科	64(58.7%)	21(19.3%)	16(14.7%)	2(1.8%)	6(7.4%)
水曜4限	32(59.2%)	10(18.5%)	7(13.0%)	1(1.9%)	4(7.4%)
金曜3限	32(58.2%)	11(20.0%)	9(16.4%)	1(1.8%)	2(3.6%)
C学科(水曜5限)	28(59.6%)	9(19.1%)	6(12.8%)	0(0.0%)	4(8.5%)
合計	92(59.0%)	30(19.2%)	22(14.1%)	2(1.3%)	10(6.4%)

採点方法として、授業態度は原則3点。授業態度が悪い、遅刻等の場合減点とした。提出物の評価はあきらかに授業態度が悪く不十分な場合は減点としたが、実際は評価することは容易ではなく、結果として出席回数と比例するものとなった。先にも述べたとおり、欠席回数5回以下の学生の平均欠席回数は2.1回と非常に低いことからA+およびAを取得した割合が非常に高い結果となった。D評価の学生は欠席回数5回以下、提出物の出し忘れが数回あるということで点数が60点に行かない学生である。メールで提出を促したが、学生からの応答はなく、D評価となった。K評価は出席回数が3分の2に満たない学生である。

③ 授業アンケート

最終回15回の授業では、大学共通の授業評価アンケートとは別に、授業アンケートを行った。設問内容は、この授業を受講することで、学生が自分の将来を考えることができたかどうか。また、学生の意識・行動に変容が見られたかどうか。そして、どの教材が役に立ったか、立たなかったかを主に聞いた。出欠表を兼ねたため、記名式で行った。

設問1：将来のことを以前より考えるようになったか？（図5）

回答は5段階。そのうち、「5：とてもよく考えた」「4：よく考えた」を選んだ学生の割合は全体で87.2%。H学科では86.9%、C学科では87.8%と学科間の差はほぼなかった。「2：あまり考えなかった」を選んだ学生が2名いた。この2名は両名共、受講態度が非常に良好な学生であったので、以前から自分の将来を考えていたために、特にこの授業に影響を受けた訳ではないことから選択したと予測される。

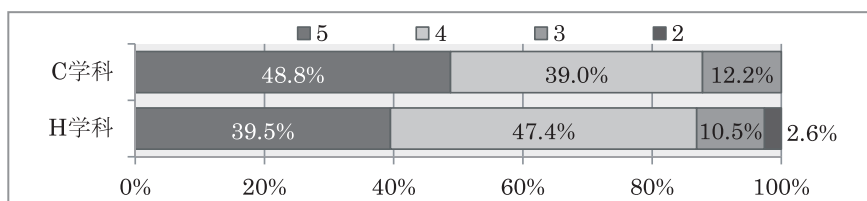


図5：設問1 学科ごとの回答割合

設問2：大学生生活を以前より充実させたいと以前より思うようになったか？（図6）

こちらも回答は設問1と同様に5段階。「5」「4」を選んだ学生の割合は全体で72.6%。設問1と比較すると、将来を考えるようにはなったが、具体的に大学生活をどうしていくかという意識変容まで至る学生の割合は10%以上減少していることが分かる。学科間ではH学科69.8%、C学科78.0%と学科で差が見られる。H学科の中でもクラスごとに見ると、金曜3限75.0%、水曜4限65.0%となり、水曜4限の割合が非常に低い。先に述べた、履修状況のうち「充実度」との相関がここで見られる。

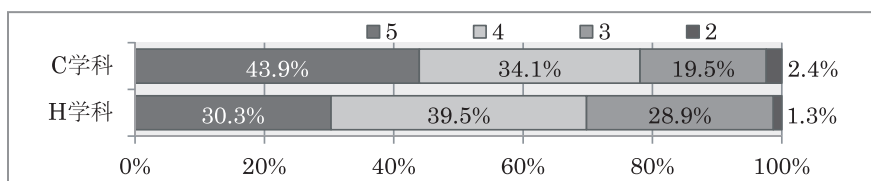


図 6：設問 2 学科ごとの回答割合

設問 3：大学生生活を充実させるために具体的に行動したことはあるか？（図 7）

設問 2 では意識変容を問い、設問 3 では行動変容を問う内容とした。結果は図 7 に見られるように「5：多く行動した」を回答した割合が大きく減少している。「5」「4：まあ行動した」をあわせても 46.2% と半数を割っている。学科ごとの割合は H 学科 42.1%、C 学科 53.6% と設問 2 と同様 C 学科が高い。充実度同様の傾向がある。成績評価は両学科であまり差がないことから、C 学科は前向きに物事を考える学生が多いことが影響していると考えられる。

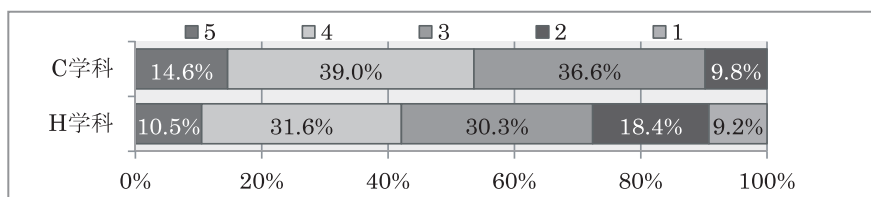


図 7：設問 3 学科ごとの回答割合

設問 4：役に立った内容と役に立たなかった内容

実施したワークの中で役に立った内容と、役に立たなかった内容を最大 3 件まで選ばせた。その結果、役に立った内容のうち、もっとも件数が多かったものが「第 14 回 あなたのキャリア・アンカー」（のべ 34 件）、次に「第 3 回 マイプランの作成」「第 11 回 あなたとお金」「第 12 回 求められる人材ビンゴ」（いずれものべ 30 件）と続く。役に立たなかった内容は「第 10 回 コンビニ弁当の分解」（のべ 40 件）、「第 2 回 Who am I?」「第 7 回 自分が暮らす地域ってどんなところ？」（いずれも 20 件）となっている。自分が暮らす地域については充実度も 4 を超え、その日の感想からも非常に満足度は高かったことが覗えたが、自分の将来につながると感じたか、否かで評価が分かれた。

このように必ずしも、教材の役立ち感と充実度のスコアは比例している訳ではない。役立ち感と充実度については、その他の要因として、役に立つとは思いが自分自身、上手く書くことができなかった場合や、現在の自分と授業で学んだ内容とにギャップがあると充実度は下がる傾向が見られる。

Ⅲ. 考察

まず、自己認識としては、最終回に授業内に課した振り返りレポートの内容から読み取ることができる。レポートのテーマは「2012年7月現在の私～大学生活4か月を過ごして～」。入学してから現在までを振り返り、自分自身の変化や成長した点を中心とし、結びに夏休みや後期以降に向けての抱負や目標を書かせた。大学指定のレポート用紙1枚の3分の2以上埋めるよう指導し、結果として600～1000字程度となった。

学生が記述内容を分類してみると表7の様になった。複数項目について記述してある場合は、記述順や分量から一番重要視したと予測される項目を集計した。

表6：レポートに記述のあった項目の内訳

	H学科	C学科	合計
1. 生活の変化	24	10	34
2. 成長、学業以外の学び	12	5	17
3. 両親・家族への感謝	1	1	2
4. 大学での学び	13	7	20
5. 部活・サークル	20	4	24
6. 友人・人間関係	13	10	23
7. アルバイト	3	1	4
8. 社会活動(学外団体、ボランティア等)	2	0	2
9. 将来・職業	8	4	12
10. その他	1	0	1

大学に入学したことでこれまでの生活から変化したことについて触れている学生が最も多い。1～2は自分自身に起った生活の変化を観察し記述しており、3～6は大学生活を中心とした人との関わりの中での自分の成長や変化、7～9は更にその先にある社会にまで考えが及んだ際の自分の気持ちや行動の変化にまで言及していると考えることができる。

学生が捉える視野は第2回で行った「Who am I?」での自己認識の範囲と相違ないということもできる。自分について述べる際に自身の容姿・好みについて記載するケースが非常に多く、他者との関わりや、社会における自分のポジションの記載は多くない。

以上のことから、多くの学生は身の回りの生活の変化の言及に止まるものが多く、まだ、その外側である社会活動にまで及んでいない者が多いことが分かる。すなわち、自己認識という点については、大学生活が始まってから前期終了までの4か月間で大きく変化した学生はあまり見られないと考えることができる。

次に、キャリア・アンカーはどうであったか。キャリア・アンカーはアメリカの心理学者エドガーH・シャインが提唱した概念である。キャリア・アンカーとは、どうしても犠牲にしたくない、ほんとうの自己を象徴するコンピタンスや動機、価値観について自分が認識していることが

複合的に組み合わせたものであると定義されている。〔5〕アンカー（碇）を降ろすことで船が安定するように、キャリアにおける軸を据えることで生き方が安定することから名付けられた。キャリア・アンカーは「特定・専門指向」「総合・専門指向」「自律・自立指向」「安全・安定指向」「創意・創業指向」「奉仕・貢献指向」「挑戦・克服指向」「生活・様式指向」の8つに分類されている。

第14回ではキャリア・アンカーを選択させた上でキャリア・アンカーのキーワードを使った自己紹介文を書かせた。本来、キャリア・アンカーは仕事や社会生活上での自分の行動パターン、価値パターンなど「キャリア指向質問票」（40問）に答えることで8つのパターンのどれに相当するかを導き出すものである。しかし、大学1年生では自分の仕事や社会生活での行動パターンに回答することは難しい場合がほとんどである。そこで、教材は8パターンの指向に相当した8人のキャラクター紹介文を読んでもらい、自分はどれに近いのか、あるいは共感するか上位3人を選び、順位づけをさせた。

表7：クラス別キャリア・アンカー1位選択状況 数字は人数。（ ）はクラス内割合

	H学科水曜4限	H学科金曜3限	C学科水曜5限	合計
特定・専門	5(12.8%)	3(6.8%)	2(7.1%)	10(9.0%)
総合・管理	0(0.0%)	1(2.3%)	2(7.1%)	3(2.7%)
自律・自立	9(23.1%)	14(31.8%)	5(17.9%)	28(25.2%)
安全・安定	4(10.3%)	6(13.6%)	4(14.3%)	14(12.6%)
創意・創業	0(0.0%)	1(2.3%)	1(3.6%)	2(1.8%)
奉仕・貢献	5(12.8%)	11(25.0%)	5(17.9%)	21(18.9%)
挑戦・克服	4(10.3%)	6(13.6%)	3(10.7%)	13(11.7%)
生活・様式	12(30.8%)	2(4.5%)	6(21.4%)	20(18.0%)

8つのキャリア・アンカーの中から学生が1位に挙げた項目をクラス別に見ると、表7に示す通りであった。3クラス共通して「自律・自立指向」、「生活・様式指向」を選択した学生が多い。これは、仕事と言うよりは、自分のペースやブラーベートを大切にしたいという気持ちの表れであることが、自己紹介文から読み取ることができた。大学1年生の段階では、仕事についての具体的な欲求はあまりなく、今の生活の延長を保ちたいと考える傾向がある。H学科は教員志望の学生が少なくない。彼らは「特定・専門指向」あるいは「奉仕・貢献指向」を選んだ者が多い。仕事の捉え方の違いが表れている。C学科は幼児教育・保育の道を志すものがほとんどで、こちらは「奉仕・貢献指向」が高くなっている。

上位1位～3位の組み合わせは「自律・自立指向」「安全・安定指向」「生活・様式指向」が最も多い。授業を通して見てきた学生の姿から想像すると、この3つの選択は、自分に自信がなく臆病なケースや将来がまだ具体的になっていないので変化が少ないと感じるものを選ぶケースが考えられる。

以上の結果は先行する類似の研究から同様の事が言え、A大学特有の状況とは言えない。二村が行った379名の大学1年生にキャリア・アンカーサーベイの結果からも「保障・安定性（本稿の安全・安定指向に相当）」「生活全体のバランス性（生活・様式指向に相当）」のスコアが高く、比較対象として行われた企業人の結果と比べても高いことが分かっている。〔6〕

以上の事から、全体の傾向としては、自分自身やその周辺にしか意識が及んでいるに過ぎない学生が多いことが明らかになった。振り返りミニレポートで自身周辺の変化に止まったと記述している学生はキャリア・アンカーにおいても「安全・安定」や「生活・様式」を選択し、振り返りミニレポートにおいて「8. 社会活動や」「9. 将来・職業」選択するという相関があるのではないかと考え、確認してみた。しかし、相関は見られなかった。

相関が見られないということは何を意味するのか。ここで新たに5つの視点を用いた。「キャリア・アンカー」の訳者である金井が挙げたキャリア・アンカーの構成要素5点である。(a)能力、欲求、価値についてのセルフイメージ（自己像）である。(b)節目節目のきっかけがないと、はっきり自覚されない自己像である。(c)一人で自己内省するより、同僚や配偶者との対話から浮かび上がる自己像である。(d)組織、仕事を変遷しても「自分としては絶対に捨てたくない」コア（核）である。(e)キャリア・ダイナミクス（仕事生活の動態）の中の基軸（不動点）である。〔5〕

1年前期にキャリア科目を受講した学生は、キャリア・アンカーを考える際に、(a)(b)については該当する状況にあると言える。しかし、(c)(d)(e)については個々の学生の状況にもよるが、意識する機会が多くないと思われる。つまり、自己認識をしたうえで、「こんな暮らしがしたい。」「こんな働き方ができたらいい。」という点での将来志向は描いているものの、自己認識に加え、社会認識した上での職業選択という点での将来志向においては曖昧であったり、不十分であったり、的確ではなかったりするということと言える。

IV. おわりに

今回、キャリア・アンカーを用いて、学生の自己認識と将来志向を明らかにすることで今後の授業プログラムの課題も明らかになった。それは学生に十分な自己認識と社会認識の上に立った将来志向を描かせるために、いかに社会認識をさせるかが重要であるという点である。

自己認識の点でも実は、同様なことが言えるが、社会認識というのは、社会（他者）と関わることでより現実的に捉えることができるものである。キャリア科目において学生に社会を認識させるためには、講義型では限界がある。伝えたとしても実感を持ったものにすることは難しい点が多いだろう。体験型の授業も交えて提供することが益々重要になってくると言える。それは単独の授業のみならず、他のキャリア科目との連携、時には授業外の活動などとの連携も意識することや、学生に示していくことが重要であろう。

引用文献／WEB

1. 文部科学省 中央教育審議会.「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」。2011. p.16.
2. 一.「初等中等教育と高等教育との接続改善について(答申)」。1999. 第6章第1節.
3. 一.「学士課程教育の構築に向けて(答申)」。2008. p.18.
- 4.「2011年度総合基礎科目運用(A大学学内資料)」。2010. pp.1-3.
5. エドガーH. シャイン 金井壽宏(訳).「キャリア・アンカーー自分の本当の価値を発見しようー」. 2003. p.1, 95.
6. 二村英幸.「キャリア教育のためのキャリアアンカーサーベイ開発報告」. 経営行動科学学会年次大会: 発表論文集 (10). s.l.: 経営行動科学学会, 2007. p.93, 94.

参考文献

- 川延宗之・川野辺裕幸・岩井洋『プレステップ基礎ゼミ』弘文堂(2011)
- 岩井洋・奥村玲香・元根友美『プレステップ キャリアデザイン』弘文堂(2012)
- 渡辺三枝子・東田晋三監修『キャリアVIEW』学事出版(2006)
- 小野田博之『自分のキャリアを自分で考えるためのワークブック』日本能率協会マネジメントセンター(2005)

受理日 平成25年3月29日